

## 主 題：祝福と呪いの狭間にあるもの

## 聖書箇所：詩篇 93篇

今よりもっと若かったとき、多分10代前半の頃だったと思いますが、ある本を読んでいたとき、一つの概念を学んだことを今も憶えています。それは今も私の頭にしっかり残っています。それはこのようなことです。「私たちの人生の上に起こるあらゆる出来事、それが良いことであっても悪いことであっても、嬉しいことであっても悲しいことであっても、その出来事自体に何かの感情や良さ悪さというものはない。たとえ、私たちが何かいやな出来事に会ったとして、それをいやだと決めるのは私たちであって、その出来事自体がいやだという性格をもっているわけではない。いろいろなことが私たちの人生に起こるとき、それをどのように受け入れるのか、どのように捉えるのかというのは、その出来事が決めるのではなく、それを受け入れ理解し消化する私たちの側にある。」とその本の著者は訴えていました。私たちがどのように人生を見るのか、どのような観点で物事を捉えるのか、それによって私たちの周りで起こるあらゆる出来事に対して、私たちはそれが良いもの嬉しいものであると決め、ときには、それが悪いもので悲しいものであると決めるのだということです。私が読んだその本は聖書に関する本ではありませんでした。また、その著者がクリスチャンであるかどうか知りません。多分そうではないだろうと思います。けれども、このことをそれから数十年考えている中で、この著者が言っていることは確かに一理あるなと思うのです。では、私たちはどのようにして私たちの周りで起こってくる様々な事柄に対して、正しい理解をもってそれらを正しく捉えることができるのでしょうか？確かに、私たちの周りにはいろいろな出来事があります。うれしいことも悲しいことも辛いこともあります。私たちの心を楽しくさせることもたくさんあります。いったい、私たちはどのようにしてそれらを正しく理解し捉えることができるのでしょうか？どのようにして私たちは起こる出来事が良いものであると決めることができるのでしょうか？また、悪いものであると決めるのでしょうか？前回、そのことを考え始めました。

私たちはこのような質問をしました。いったい何が私たちの人生における祝福と呪いの間にあるのかと。祝福と呪いを分けるラインはどこで引かれているのか、私たちがそこで考え、そして、出した答えは「神の主権」というものでした。この質問に対する答えをわずか5節の短い、しかし、すばらしい真理が記されている詩篇93篇から学んで行きました。前回、「神の主権」が祝福と呪いを分ける線であるということ、そして、私たちがどのように神を捉え神の主権を理解するかということが、私たちが祝福に満ちた人生を送るための大きなカギであるということを話しました。私たちは神がいかに偉大な方であり、その方がどのように私たちの人生のすべてを支配しておられるのかを正しく理解することによって、私たちがもっているあらゆる疑問に対して解答を得ることができると考えました。前回、私たちはこの93篇の最初の2節を見ました。少し復習をしましょう。

## ☆神の主権

## 1. 神の主権を理解するとき、私たちの問題は消え去る 1-2節

## A. 神の比類なき統治 1a節

- 1) 排他的な統治＝神以外に王である方はいない、神だけが支配者である。
- 2) 不断の統治＝絶えることがない、常に継続して続くものである。神は治めることを止めることがない。
- 3) 積極的な統治＝積極的に今も変わることなくご自身の計画を被造物の中で為そうとされている。
- 4) 拒むことのできない統治＝だれも受け入れないと言えないもの、限界・制限がない。

神の比類なき統治を私たちが考えたとき、神が考え計画し為さろうとしていることが私たちの人生の上に必ず起こり、神以外にそれをする方はいないし、神が良しとされていないことは私たちの人生には起こらないと私たちが知ることによって、私たちはあらゆることに関して、神さま、あなたがそう言われるのなら、私はそれを受け入れ信頼しそれに従って行きますと言うことができるのです。

## B. 神の栄光に満ちた統治 1b-2節

- 1) 荘厳な統治＝神が何かを為されるときそこに神のすばらしさが常に現わされること。最も顕著な例は被造物。神ご自身の栄光は神が造られ今も神が統治され保っておられる被造物によって明確に現わされる。救いのわざもその通り。
- 2) 力にあふれた統治＝神はいつでも神が願っていることを行なうための準備ができている。その力をもっておられる方。だれもこの神のご計画を妨害するものはいなかった。
- 3) 不変の統治＝変わることがない統治、神は決してその御座から降りられることはない。永遠に変

わることがない王である。

4) 永遠の統治=永遠の初めから終わりに至るまで、神は王として君臨しすべてのものを統べ治めておられる。

私たちがこのことを理解したとき、唯一、私たちができることは神の前にひざまずいて神を礼拝することです。神の栄光に満ちた統治は私たちが神を礼拝する理由を与えます。神を礼拝せずにはおられないのです。そして、神の比類ない統治を理解するなら、私たちは神の前にひざまずいて神に従うことを決心します。神の栄光に満ちた統治は私たちに礼拝させ、神の比類なき統治は私たちに従順を教えるのです。このような神のすばらしい主権を私たちが理解するとき、私たちはヨブと同じように言うことができます。「**主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。**」(ヨブ1:21)と。例え、どのようなことがあっても、神がご計画され神がそれを成し遂げておられるゆえに、私はそこに神のすばらしさを見、神の前にひざまずいて神に従い神を礼拝すると言うのです。

今朝はこの詩篇93篇の3節から、著者がもう二つ、大切なことを教えているその教えに目を向けて行きます。私たちが神の御力を正しく恐れ、神のみことばをしっかりと受け入れたとき、私たちは問題から解放されます。私たちは祝福のうちに立ってこの人生を歩んで行くことができます。私たちの人生観が変わるとき、私たちが自分の人生を神の主権の側に立ってそれを正しく見つめるとき、私たちの人生は喜びと幸福に満ちたものへと変わって行きます。なぜなら、神はそのような祝福を私たちに与えてくださっているからです。今朝、皆さんといっしょに見て行く箇所を通して何よりも願うことは、私たちが確かに神の主権をしっかりと知り、それゆえに私たちが生きるこの人生を境界線の祝福側に立って、喜びに満ちて歩むようになりたいということです。詩篇の著者はこのように歌っています。

**93:1 主は、王であられ、みいつをまとしておられます。主はまとしておられます。力を身に帯びておられます。**

**まことに、世界は堅く建てられ、揺らぐことはありません。**

**93:2 あなたの御座は、いにしえから堅く立ち、あなたは、とこしえからおられます。**

**93:3 主よ。川は、声をあげました。川は、叫び声をあげました。川は、とどろく声をあげています。**

**93:4 大水のとどろきにまさり、海の力強い波にもまさって、いと高き所にいます主は、力強くあられます。**

**93:5 あなたのあかしは、まことに確かです。聖なることがあなたの家にはふさわしいのです。主よ、いつまでも。**

先ほど振り返ったように、前回、私たちが神の主権をしっかりと知り、神が御座に着いておられる王であることを知るなら、私たちの問題は消えて行くということを考えました。私たちは神の完全な支配権に信頼を置き、神の主権の前に従順に生きることができるのです。この神の主権に関する、神の統治に関する説明を私たちがしっかりと理解するなら、それだけで十分、私たちは神の御前に来てひざまずき、神を礼拝し、神さま、私はあなたに従って行きます、あなたこそ私の王ですと言うことができるでしょう。けれども、この著者はさらにこの神の主権について私たちに教えようとするのです。

## **2. 神の偉大な力を理解するとき、私たちの問題は消え去る 3-4節**

神は真にすべてを治めておられる神だということを私たちに教えるために、著者は神の偉大な御力について話を進めて行きます。それはまるで、もしだれか私の神に打ち勝つものがあるとするなら、それに勝ちたいと願いそれに戦いを挑もうとするものがあるなら、どうぞやって来て戦ってみてくださいと、そのように招いているように見えます。この著者は偉大な力というものと神の御力を対比することによって、神がいかにすばらしい主権者であるのかということを証明しようとしているのです。もし、神がどれほど偉大な主権者であったとしても、神に打ち勝つことができるような力が他にあるとするなら、神の主権は危ういです。だから、著者はあえてそのような力を挙げてくるのです。この地上で考えることができる力を挙げて私たちに教えるのです。この神こそが偉大な力をもっておられる方であるゆえに、その方を正しく知り正しく恐れるなら、あなたの問題は消え去ると言うのです。

いったい著者はだれをもって来るのでしょうか？彼は3節でこのように言いました。「**主よ。川は、声をあげました。川は、叫び声をあげました。川は、とどろく声をあげています。**」、この地上でいったいどのようなものが神の偉大な力に対抗することができるのか、著者が考えたことは「川」と訳されていることです。ここで訳されている「川」ということば、皆さんはどのような川を想像されますか？ここで使われている「川」ということばは非常に力強い大水が流れているそのような川です。しかも、この「川」という単語は、日本語では全く分かりませんが、複数形で使われています。一本の静かな川が流れているのではないのです。これはたくさんの川が連なりあってものすごい量の水が一気に流れ出て来るような、そんな猛り狂う水の流れを表わします。このことばはときに「洪水」と訳されます。ですから、このように読むことができるのです。「主よ、洪水は声をあげました。」と。ヨナが嵐の中で船から海に投げ込まれたときに、ヨナのからだは海の底に沈んで行きます。そのときに、ヨナを沈めたのがここで使われていることばです。「**あなたは私を海の真中の深みに投げ込まれました。潮の流れが私を囲み、あなたの波と大水が**

みな、私の上を越えて行きました。」(ヨナ2:3)。波の力、津波と訳すことができます。ですから、「**主よ。津波は、声をあげました。**」とそのようにも捉えることができます。別の言い方をするなら、ここで言われている川というのは、猛り狂った岸に押し寄せる大きな波なのです。その波は岩を削り海岸線を変え、ときに、何千何万という人を飲み込んでしまうような、そんな偉大な力をもった水の流れなのです。この3節を見ると3回同じことばが使われていることに気がきます。これはヘブル語の詩的表現としてよく見られるものです。最も有名なのは「聖なる聖なる聖なるかな」と天使たちが天で神を賛美するときに、そう叫んでいました。神は他にないほど圧倒的な形で聖なる方であると、そのことが強調されているのです。それと同じことがこの93:3でも見られます。「川の流れ、川は、川は、川は」、「津波は、津波は、津波は」と言うのです。これ以上ないほど大きな波が押し寄せてくるのです。何十メートルもあるような大きな波が岸に向かって押し寄せて来る、ものすごく荒れた嵐の中で大型の船がまるで木の葉のように揺らされている、岸辺に打ち寄せてくるその波の力が余りにも強いがゆえに、そこにあった岩々が粉々になって行く、勢いのある洪水の流れのゆえに強固な橋が崩れ落ちて行く、私たちはそれらを映画などで見たことがあります。そして、「**声をあげました。**」「**叫び声をあげました**」「**とどろく声をあげています。**」と、これも同じように3回「**あげる**」という動詞が繰り返されています。著者はこれ以上ないほどの形でこの偉大な大水が叫び声をあげてうなりをあげて、岸へ建物へと押し寄せてくる姿を表わしているのです。私たちはこの3節を見て想像することができます。荒狂った嵐の中で非常に力強い大波が岸辺へと押し寄せてくる、その波の音は私たちに恐怖を抱かせ、私たちはそこで震え上がってしまうようなそんな状況です。それがこの著者が考える、神の力に匹敵するかもしれないと思ったこの地上の偉大な力だったのです。これが挑戦者です。地上の挑戦者です。

それに対して、著者はチャンピオンを紹介するのです。青コーナーには洪水がいました。赤コーナーからは偉大なチャンピオンが登場してきます。4節「**大水のとどろきにまさり、海の力強い波にもまさって、いと高き所にいます主は、力強くあられます。**」と神を紹介するのです。この著者はもうすでにこの方が力を身に帯びておられる方だと言っていました。神はあらゆることを行なうことが可能な方で望んでおられる計画を全うすることができる方だと教えていました。けれども、この4節において著者は神の御力をこの地上で考えることができる最も強力な力と比較するのです。神は偉大な打ち寄せる大波に、ものすごい猛り声をあげて人々に襲いかかってくる津波に、その力に勝利することができるのでしょうか？著者は言います。そんなことは問題ではないと。たとえ、大波が数えることができないほどの数で打ち寄せてきたとしても、神は決してそれに負けることはない、たとえ、どれほど大きな声をあげて波が迫って来ても、どれほど大きな力で海岸沿いにある大きな岩々を打ち砕くことがあっても、天におられる主はそれらよりもさらに力強く、これらの波が地上の岩を打ち砕いたとしても、天におられる私たちの巖を打ち砕くことは絶対にないということを私たちに教えるのです。

ダビデは神についてこのように語っています。同じ詩篇65:7「**あなたは、海のとどろき、その大波のとどろき、また国々の民の騒ぎを静められます。**」と。また、別の著者はこのように表現しています。89:9「**あなたは海の高まりを治めておられます。その波がさかまくとき、あなたはそれを静められます。**」と。皆さん、見えますか？神が大波に向かって手を差し伸べておられる姿を。そして、神はその波を静められるのです。エレミヤ書5:22では「**あなたがたは、わたしを恐れないのか。——主の御告げ。——それとも、わたしの前でおののかないのか。わたしは砂を、海の境とした。越えられない永遠の境界として。波が逆巻いても勝てず、鳴りとどろいても越えられない。**」と、神はその境界を定めたゆえにどれだけ波に力があつたとしてもそれは境界を越えて行くことはできない、神の方が力が上だと言います。神は猛り狂う大波の飼い主なのです。神はまるでサーカスの猛獣使いのようです。たとえ、どれほど恐ろしい姿をしているライオンであっても、神が鞭を振るうならすべてのものはおとなしく従うと言うのです。皆さん、思い出されませんか？マルコの福音書4章に出てくる記事、ガリラヤ湖で弟子たちが大騒ぎしたことを。嵐が起こって船が沈みそうになりました。そのときイエスは休んでおられました。弟子たちは「**先生。私たちがおぼれて死にそうでも、何とも思われぬのですか。**」と、そのとき「**イエスは起き上がり、風をしかりつけ、湖に「黙れ、静まれ。」と言われた。すると風はやみ、大なぎになった。**」、すべては納まって静寂な状態になりました(マルコ4:35-41)。神は怒り狂う大波をも静めることができます。

それだけではありません。神は実際に大波を起こすのがご自分だと言われます。エレミヤ31:35「**主はこう仰せられる。主は太陽を与えて昼間の光とし、月と星を定めて夜の光とし、海をかき立てて波を騒がせる方、その名は万軍の主。**」、なぜ海が猛り狂うのでしょうか？このような想像がいいのかどうか分かりませんが、私はどうしても想像してしまいます。神が海の真ん中で海に棒を突き刺してぐるぐる回す、だから、大波が起こる、それを起こすのも神だからそれを静めることができるのも神です。神はこの地上のどれほど偉大な力であつたとしても、それに遥かに優る力をもっておられるのです。私たちの生涯において、これほどまでに偉大な力をもった神以外に私たちが恐れる対象をもつべきではありません。この

ような偉大な力をもっておられる方であるゆえに、私たちは恐れおののきこの方の前に立たなければいけないのです。この方は主権者であると著者はもうすでに言いました。この主権者は他にだれも何も太刀打ちできない偉大な力を帯びた主権者だと。神の主権の前にライバルはだれ一人いません。それに立ち向かうものはだれもないゆえに、神の計画が妨害されることは決してあり得ないのです。

確かに、この箇所は著者が実際の波、水の流れを指して語っていると思います。なぜなら、この文脈がそのことを教えるからです。けれども、多くの注解者たちはこの3節の部分のことばをとって、これは神に逆らう人間の世界の象徴であると考えます。確かに、聖書の他の箇所ではこのような表現を通して人々の神に対する反逆を表わすことがいくつもあります。私たちがなぜそのようなには取らないのかというと、ここでそのように比喩的に捉える理由が見つからないからです。けれども、同時に、ここで言われていることがそのような人間の叫びに適用することもできると思います。私たち人間も神に対抗しようとしているからです。詩篇2篇を見てください。そのことがここで教えられています。まるで大波が神に向かって叫び声を上げ騒ぎ立つのと同じように、この著者は私たちに言います。人々が、国々が神の前に騒ぎ立つその姿を。著者は神をその王座から降ろして神が立てられたメシヤを滅ぼして、自分たちが君臨しようとする人々のその姿を2：1－3に記しています。**「なぜ国々は騒ぎ立ち、国民はむなしくつぶやくのか。：2 地の王たちは立ち構え、治める者たちは相ともに集まり、主と、主に油をそそがれた者とともに逆らう。：3 「さあ、彼らのかせを打ち碎き、彼らの綱を、解き捨てよう。」**、これが神を信用しない、神に従おうとしない、神を信じようとしない不敬虔な者たちの生き方だと言います。人々は自分たちが神の上に立つ者であり、自分たちこそが自分の人生を支配するにふさわしい者だと考えたのです。それゆえに、**「さあ、彼らのかせを打ち碎き、彼らの綱を、解き捨てよう。」**と、自分たちの自由に思うままに生きることがふさわしいと言うのです。そのような者たちに対して神は何をされるでしょう？4節**「天の御座に着いておられる方は笑う。主はその者どもをあざけられる。」**、そして、その者たちに神は怒りを向けられ彼らは恐れおののくのです。5節**「ここに主は、怒りをもって彼らに告げ、燃える怒りで彼らを恐れおののかせる。」**。神は言われます。王は一人しかいない、神が王として立てられたイエス・キリスト、そして、その方を通して神ご自身が確かにこの世界すべてを統治しておられるということを私たちに告げるのです。だれ一人としてこの方の御座を奪うことはできないのです。この方からその支配権を奪い取ることはできないのです。だれ一人この方の支配から逃れて私が私の王であるということはできないということをこの詩篇は教えるのです。そのことを示された後に神は王たちやさばきづかさたちにこのように勧めます。彼らを招くのです。わたしの主権を受け入れなさい、神の計画だけが成し遂げられるゆえに、わたしの計画を受け入れなさい、神だけが支配権をもっておられるゆえに、わたしの支配のもとに身を置きなさいと。この著者は12節でこのように告げています。**「御子に口づけせよ。主が怒り、おまえたちが道で滅びないために。怒りは、いまにも燃えようとしている。幸いなことよ。すべて主に身を避ける人は。」**、神は言われます。王である方を認めなさい、その方の前に出てきて、その方の前にひれ伏し、その方に口づけしなさい、忠誠を誓いなさい、その方を礼拝しなさいと。私は神に打ち勝つことができる、私の支配者は私であり神ではないというそのような愚かな考え方をしている人たちに、神は何とあわれみ深くわたしのもとに來なさいと招いておられることでしょうか！そして、神は言われます。それをする人には幸いが与えられると。

人生の祝福と呪いのその境界線には神の主権があります。それを認めるときに幸いがあるという約束があるのです。それを認めないで神と争うことを選択し神の御力の前に、神の主権の前にひざまずくことをせず、私は私の生き方をして行きますという愚かな考えをもつ者たちに、神はその人をあざけられ笑われ御怒りを下すと言います。これはすなわち「呪い」です。皆さんはどちらに立っていますか？皆さんはこの偉大な力をもっておられる王を自分の人生の王であると認め、その方の前にひざまずきその方を恐れおののいて受け入れていますか？それがこの詩篇93：3－4で著者が私たちに尋ねる非常に重要な疑問です。私たちはこの方の前に来て自分たちのすべてを明け渡し、神さま、どうぞあなたの主権を私の人生すべてに働かせ、あなたの思うままに私を生かしてくださいと、そのように言うておられますか？皆さんが抱える人生の多くの問題、もしかすると、それらは皆さんが正しく神である主が皆さんの主権者であるということを認めていないから起こることかもしれません。もし、いやなことがあったとして、でもそれが皆さんを愛し皆さんを自分のものとして捉え、その者に最善を約束しておられる方が良しとして贈ってくださったものであるとするなら、それは皆さんにとっていやなものでしょうか？そのように捉えるべきでしょうか？この方は偉大な力をもった主権者です。私たちがその方の前に正しくひざまずきその方に身を避けて行くなら、そこには祝福が待っているとこの著者が私たちに教えるのです。

### 3. 神のみことばを正しく理解するとき、私たちの問題は消え去る 5節

そのことが5節に記されています。実は、1－4節は原文を見ると一つのまとまりであることが分か

ります。なぜなら、「主」ということばが1節の最初と4節の最後に使われていて、その間をサンドウィッチのように挟んでいるからです。神の主権、神が統治されているとはどういうことなのか、そのことを告げ、その統治がいかに偉大な統治であるかを宣告して、さらに、著者はもう一つのことを加えるのです。それが神のみことばに関することです。いったい、どうしてこの方が本当に主権者であることを確信することができるのか、そのことを著者は私たちに教えるのです。このみことばが確信を与えると。5節「**あなたのあかしは、まことに確かです。聖なることがあなたの家にはふさわしいのです。主よ、いつまでも。**」ここで私たちは二つの事柄を見ます。

#### 1) 神のみことばは確かである 5 a 節

ここで著者は「あかし」ということばを使います。このことばは旧約聖書の中で神のことばを表わすことばとして使われています。神ご自身について、神が求める事柄について実際にあかしをする様々なことを含んでいます。特に、啓示されたことばについて使われます。なぜなら、聖書は証人として用いられることがあるからです。イエスは言われました。「**その聖書が、わたしについて証言しているのです。**」(ヨハネ5:39)と。詩篇119を見ると「あかし」と訳されていることばが実に22回もあります。ここで著者が最も考えていることは、この詩篇のテーマに沿った事柄、つまり、神の主権についてです。けれども、著者は単に「主権」に留まるだけでなく、実は、この「あかし」は複数形が使われているから、もっと広い範囲で神のみことばについて話をするのです。神の主権に関する「あかし」も確かであるし、それ以外のこのみことばが言っているあらゆることも確かであると言っているのです。著者は「**まことに確かです**」と言いますが、この「確か」ということばは「確実性、信頼」を表わすことばです。つまり、神が言われることは疑う必要がない、確かであると言うのです。簡単にまとめるならこのように言うことができます。「神が言われたことは常に真実である」と。イザヤはイザヤ書40:8でこのように言いました。「**草は枯れ、花はしぼむ。だが、私たちの神のことばは永遠に立つ。**」、ペテロはこのイザヤが語った700年を経た後に、この箇所を引用して同じことを言いました。「**人はみな草のようで、その栄えは、みな草の花のようだ。草はしおれ、花は散る。:25 しかし、主のことばは、とこしえに変わることがない。**」(1ペテロ1:24-25)。イエスは言われました、律法はすたれることはない。神のみことばは永遠に確かである永遠に立つものであるというのです。人間が作り出した様々な規則やきまりは、まるで流砂のように変わり続けます。最近の世の中の動きを見てそのように思われませんか？10年前、20年前、50年前には考えもしなかったことが、今当然のように行なわれるのです。人々があり得ないことをしているのを見て、人々はそれは当然でしょと言います。けれども、神のみことばはそうではありません。それは確かであり変わることがないのです。なぜなら、永遠に主権者である神がそうだと行ったから変わりようがないのです。そして、そこで言われていることが変わらないゆえに、もし、このみことばが神が主権者であるというなら、その事実も変わりようがないのです。それは確実に確かなものとして定められていることなのです。

#### 2) 神のみことばは聖さを教える 5 b 節

「**聖なることがあなたの家にはふさわしいのです。**」と。この5節を見たとき、私たちは詩篇19:7を考えないではおられません。皆さん、憶えておられますか？非常に似たことばが使われています。全く同じ概念がここで語られています。「**主のみおしえは完全で、たましいを生き返らせ、主のあかしは確かで、わきまえない者を賢くする。**」、この「わきまえない者」ということばは、開かれた扉と考えることができます。開けっ放しの扉、いつも開いているので悪い者が入ってくるときも、それを閉ざして止めることができない人物の姿を表わしているのです。あらゆる事柄に開け放たれているのです。けれども、神の確かなみことばはその人を賢くすることによって、その人が扉を閉じて自分の心を守ること、また、扉を開いて神の教えを受け入れて成長することができること、そのようにさせると言うのです。そうすれば、その人は聖い者へと変わって行くのです。みことばがそのようにするからです。神のみことば、神の「あかしは、まことに確か」であるゆえに、それは聖さを求めて行かせます。このみことばをしっかり受け入れた人は神の主権に正しく従おうとするゆえに、神さま、あなたが言われることなら私は確かにそれを行なって行きますと言って、その人生を歩んで行くのです。そうすると、今まで愚かだった開きっぱなしの心の扉は閉じることを学ぶのです。悪い影響から自分たちを守り、正しい真理をうちに蓄え、日々新しい者へと変わって行きます。イエスはヨハネ17章のその祈りの中で祈られました。17節「**真理によって彼らを聖め別ってください。あなたのみことばは真理です。**」、それゆえに、聖なることは神の家にはふさわしいのです。ふさわしいというよりむしろ、聖なる者以外が神の御座の前に立つことはないのです。この神のみことばは神の主権を確かに私たちに訴えます。そして、あらゆる事柄は私たちが主権者であり王である神にふさわしい人物へと変わって行くために働きを為します。聖くなるようにと。それゆえに、この神の主権を受け入れた人は神の前に立って聖なる者として、この神を慕い崇め従順に生きて行こうとするのです。詩篇119:2ではこのように歌われています。「**幸いなことよ。主のさとしを**

## 守り、心を尽くして主を尋ね求める人々。」

神の主権は私たちにどのように生きるべきなのかをみことばを通して明確に示しています。神は実ははっきりと見える形で線を引かれています。祝福と呪いとのかいどに、このみことばを通して。あなたはわたしを主と認めますか？あなたはわたしのことばに明確に従って行きますか？あなたは聖い者としてわたしの前を歩いて行きますか？そこに太い実線が引かれています。皆さんはどちらに立っていますか？皆さんは確かにこのみことばを信頼し、みことばを受け入れて、神さま、確かにあなたの言われる通りです、あなたは私の人生の主であり、この世界すべての主であり、それゆえに、私はあなたのみことばに従って行きたいと願いますと、そう言って葛藤の中にあってもこのみことばを実践して行こうと日々努力しておられますか？それとも、神さま、あなたの言われることは確かにそうかもしれませんが、私には私の生き方があるから私の思うように生きさせてくださいと言っていますか？その態度は明らかに神を王としている生き方ではありません。

人間の歴史のその初めから終わりまで、神の主権を拒むという事実、そして、そのことによってもたらされる影響に侵され続けています。エデンの園でアダムとエバが神の主権を拒んだその日からずっと、私たちは自分自身を自分の人生の神とし、自分自身の主として生きていました。そして、それこそがまさに、人間にとって一番の問題になったのです。今日でも、私たちは神を神としないがゆえに、神を王としないがゆえに、人生の様々な問題に苦しみを覚えています。私たちは覚えておかなければいけません。神の主権にひざまずかない私たちに対して神は怒っておられることを、この方が私たちにこちらに來なさいと言っておられることを、わたしの子に口づけしなさい、わたしを王として認めるならそこには幸いがあると、そのように求めてくださっていることを、そして、私たちがそれを確かにするなら、神の主権をしっかりと理解し、神の御力に恐れを抱き、神のみことばを正しく受け入れ、それに従順に従って歩いて行くな、私たちは神の永遠の祝福にあずかることができるのです。

この詩篇の著者は「**主よ、いつまでも。**」と言ってこの詩篇を終わります。このことばを皆さんは二つのうちのどちらかの意味で言うことができます。もし、皆さんがこの著者が言うことにしっかりと耳を傾け、この偉大なる王の中の王にひざまずいて従順の生涯を生きて行こうとするなら、皆さんはこの「**主よ、いつまでも**」ということばを慰めの中で安らぎの中で祝福に満ちたその中で言うことができます。必ず、神が永遠の祝福を私たちに与えてくださることを知っているからです。けれども、もし皆さんがこの著者の言うことばに耳を傾けずに神の前にひざまずくことをせず、神を王と認めず主と認めることなく、このことばを言うとするなら、それは皆さんにとって呪いのことばになります。なぜなら、神を主と認めないゆえに、神の怒りはあなたの上に永遠に留まり続けるからです。皆さんはどのような意味でこのことばを言っておられますか？皆さんは祝福と呪いの狭間にあって、どちらで「**主よ、いつまでも。**」と言いますか？人生にはいろいろなことが起こります。皆さんはそれをどのように見つめるのか、それは皆さんが決めることです。主の主権を認める人は祝福をもってあらゆる事柄を見ることができるでしょう。主の主権を認めない人は呪いのうちにそれを見るのです。